

道徳だより



テーマ:道徳の時間の発問を考える

京都市道徳教育研究会

会長 前田 恵美

広報部

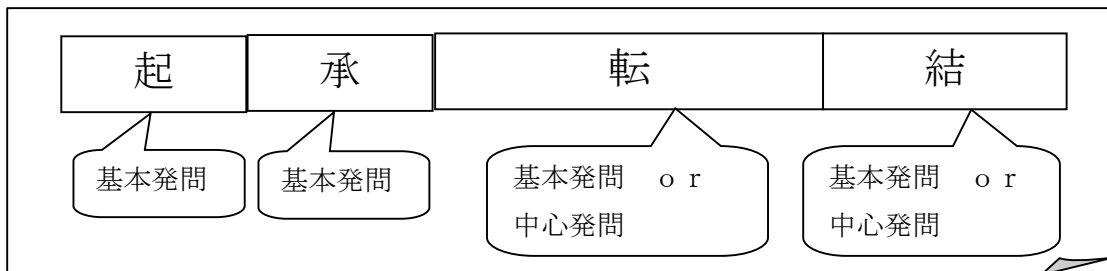


言語活動を充実させる，そのスタートとなる発問について考えてみました。

道徳の時間の発問は「中心発問」と「基本発問」に分けられます。その授業の中でねらいに迫っていくための発問を「中心発問」とし，中心発問を深めるために必要な他の発問を「基本発問」と言います。

1) どこで発問をしたらよいか迷った時は・・・。

道徳の発問を考える時に迷ったら，教材を起承転結に分け，その中で一つずつ発問を考えると考えやすくなります。中心発問は「転」か「結」の場面で行います。



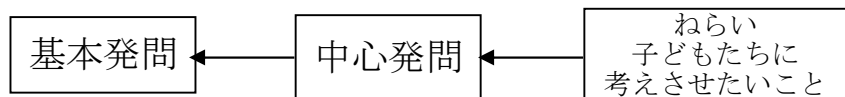
転の場面では，中心人物の気持ちが変わるところが書かれているので，その気持ちの変化や心の葛藤を中心発問として考えていきます。心の葛藤を考え，様々な意見を聞き合ったり，どうして気持ちが変わったのかということを考えていってねらいに迫っていくことができます。

また，結の場面では，最後の結果が書かれています。道徳的な行いをした後の気持ちを考えることができます。よいと思った行動をとった後の温かい気持ちを膨らませていくことでねらいに迫ることができます。

高学年になるほど，「転」のところを中心発問にすることが多くなります。それは，発達段階に合わせて，結果ではなく過程を大切に子どもに育てていく必要があるからです。

2) ねらいから発問を考える。

なぜ発問をするのかというと，それは言うまでもなくねらいに迫っていくためです。ねらいに迫っていく発問構成を考えるときは，ねらいに一番近い中心発問から考えていきます。子どもが迷路で困った時に，ゴールからスタートに戻っていく子がいいます。そうすると道順が分かりやすくなります。その発想と同じで，「最後に子どもに書かせたいことは何？」→「そのための中心発問はどうする？」→「中心発問を深める助けとなる基本発問はどうする？」と逆算して発問構成を考えていくと，ぶれない授業がつくりやすくなるのではないかと思います。



上記に挙げたことはあくまでも一例です。「起承転結に分ける」発問の作り方のほかにももちろんあります。いろいろ考えてみてください。

「教材のどこで発問をするか」ということが分かったら、次は「どんな発問をしたらよいか」ということで迷うことがあります。

1) どんな発問をしたらよいか迷った時は・・・。

道徳の時間では3つの理解を大切にします。「人間理解」「価値理解」「他者理解」の3つです。この3つの理解を頭に入れておくと「どんな発問をしたらよいか」が考えやすくなります。

「人間理解」・・・「やりたいと思ってもできないことがある」という人間には心の弱さがあるということに対する理解

「価値理解」・・・その時間に考えさせたい道徳的価値（例えば、「思いやり」「友情」「自立」等）に対する理解

「他者理解」・・・人によって感じ方、考え方は違うということの理解

「人間理解」を大切にした発問では、しようと思ってもできなかった時の気持ちを考えます。例えば、ルール違反と分かっているにもかかわらずやってしまった人物のその時の気持ちを考えるなどです。「ルールをやぶった時、どんな気もちだったのだろう？」といった発問です。「起承転結」で言うと「承」のあたりで出てくるので、中心発問を深めるための「基本発問」となります。

「価値理解」を大切にした発問では、ねらいとする道徳的価値を考える発問になります。例えば、ルールを破ることで誰かが悲しんでいる様子を目撃し、やっぱりルールを守ることは大切だと考えが変わったところを考えるなどです。「〇〇さんが悲しんでいる様子を見て、僕は何を考えていたと思いますか。」といった発問です。「起承転結」で言うと「転」のところにあたる、ねらいにせまる「中心発問」となります。

「他者理解」を大切にした発問は、上の2つとは少し意味合いが違います。友達の見解を聞いて、人によって感じ方や考え方が違うことを理解していくことを大切にします。だからどの発問でも他者理解を大切にすることができます。特に中心発問では、多様な考え方が出るようにし、思いを広げたり、深めたりすることが大切です。

2) 2つの発問「気持ちを問う」「理由を問う」

多様な意見を引き出し、ねらいに迫っていくためには、「気持ちを問う」「理由を問う」という2つの発問をうまく使う必要があります。

「どんな気もちだったと思いますか」などの「気持ちを問う」発問で多様な考えや思いを引き出し、「どうしてそう思うのですか。」などの「理由を問う」発問で、考えさせたい意見をさらに深めていくようにします。

「教材のどこで発問をするか」「どんな発問をしたらよいか」の次は、「どのように発問するか」を考えます。

テーマ発問（授業全体を通して考える）

例えば、内容項目「友情・信頼」の学習の時に…



発問①今の友達ともっと仲良くなるためにはどうしたらよいただろう。

児童の思考

②たくさん話をするかな？相手のことを考えるかな？



導入の時に発問して、「今日の学習で自分の答えが見つかるといいね。」と振っておけば、1時間を通してテーマをもって考えることができます。そして、終末でもう一度①の発問をして、友だちについて友だちの考えをもとに、自分の考えを深めていきます。

教材の中で問う発問（登場人物の気持ちを考える）

登場人物を見る立場を変える

自分だったら
あなただったら、
どう思いますか。

気持ちを
問う

人物になりきって
～のとき、〇〇は何
を考えていたのだ
ろう。

〇〇はどうしたら
よかったのだろう。

方法を
問う

外から見て想像する
〇〇はどんなことを考
えていたと思いますか。

この発問で道徳的価値につ
いて考えを深めていく

理由（根拠）
を問う

方法論の話し合いに終
始しないように注意

・どうしてそう思ったのだろう。
・その方法がよいと思ったのはどうしてだろう。

時間の幅を変える

～の時、～（その瞬間の気持ち）
～の間、～（ある程度の時間、
気持ちの変化がある）

言い方でもニュアンスが変わる

何に気づいたのだろう
何を思ったのだろう
何を感じただろう
何を考えていたのだろう
どんな気持ちだろう

気持ちを問われたときに「うれしかった」「悲しかった」などの感情が出てきます。そこで終わらず、その気持ちの根底にある思いは何なのか、「どうして？」と聞き、さらに思いを引き出します。方法を考えたときも、どうしてその方法がよいのかという理由を聞くことで考えを深めていきます。こうして考えを出し合っていくうちに道徳的価値についての考えが深まっていきます。

「どのように発問するか。」その時の気持ちを問うだけでなく、気持ちを比較したり、姿を比較したりして発問することもできます。「比較」した問いをつくることで、「点の発問」から点と点をつなぐ「線の発問」をすることができるようになります。

2つの場面を比較して、「どうして気持ちが変わったの?」という変化の理由や「何が違うのだろう」と考え方の根拠を問う発問をすることができます。

気持ちの変化を比較して発問する

例えば、「ブランコ乗りとピエロでは」・・・,

自分の時間も演技をやめないサムを見上げているピエロ

- ・ いい加減にしてほしい
- ・ 自分だけ目立とうとしている
- ・ 自分だって活躍したい

◎ どうして、気持ちが変わったの
だろう?

サムと固いあくしゅをかわしたピエロ

- ・ お互いがんばっている
- ・ 自分も負けられないようにしたい

誰よりも努力しているサムの姿を知っているから

もっとよくなりたいたいの
はサムも自分も同じだ

サムを恨むより自分ももっとがんばっている。

サムもサーカス団のためにがんばっている。

二つの姿を比較して発問する

例えば、「人間をつくる道—剣道—」では、負けてふてくされた自分と、立派な態度で引き上げができる大人の姿を比べて・・・

自分の引き上げの姿と大人の引き上げの姿を比べて、「ぼく」は何を考えているだろう。

自分の引き上げの姿

大人の引き上げの姿

負けたのにどうして悔しがらないだろう。

負けたのに立派な姿だ。自分が恥ずかしい。

自分もあんな姿になることができるのか。

場面場面の気持ちを問うだけでなく、気持ちの変化の理由を問うことで、気持ちや言動の根底にある思いにせまることができます。

二つの姿を比較して問うことで、よりよい姿のみを「点で考える」のではなく、できない姿からよりよい姿を「線でつないで考える」ことができます。